児童の資質や能力を育成する評価に関する研究

－児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックの作成と活用をとおして－

大船渡市立末崎小学校　教諭　**金　野　　晋**

Ⅰ　研究目的

「生きる力」を育成するためには、基礎的・基本的な内容の確実な定着はもとより、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力を育成することが求められている。これらの資質や能力は、指導と評価を一体的に進めることにより育成されるものである。そこで、これからの学習指導においては、学習指導要領に示された目標やねらいの実現状況を適切に把握し、その評価結果を指導に生かしていくことが必要である。

しかし、本校児童の実態をみると、基礎的な内容を理解しているものの、これを基に思考を深め、適切な判断を行ったり、よりよい表現をしたりすることが十分とはいえない傾向にある。これは、評価が児童の変容を把握しやすい知識などの量的な内容に偏りがちであり、児童の思考力、判断力、表現力などの資質や能力の質的な高まりを十分には把握できず、適切な指導に結び付けることができなかったことが要因と考えられる。

このような状況を改善するためには、学習過程における児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックを作成する必要がある。そして、児童の思考力、判断力、表現力などの資質や能力の質的な高まりを適切に把握し、指導に生かしていく必要がある。

そこで、この研究は、小学校国語科の授業実践をとおして、ルーブリックの作成と活用を図った児童の資質や能力を育成する評価について明らかにし､学習指導の改善に役立てようとするものである。

Ⅱ　研究仮説

教科の学習指導において、児童の資質や能力の段階を児童の具体的な姿とともに示したルーブリックを作成し、これを基に児童に目標の実現状況と次の学習の方向性を知らせ、振り返りを行わせる学習指導を行えば、教科における資質や能力を育成することができるであろう。

Ⅲ　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　児童の資質や能力を育成する評価に関する基本構想の立案

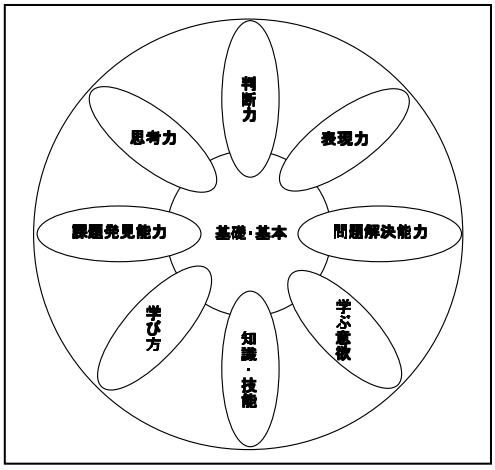
(2)　児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックを作成し活用を図る教科の学習指導の手だての試案の作成

(3)　児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックを作成し活用を図る小学校国語科の学習指導の手だての試案の作成

(4)　授業実践
(5)　実践結果の分析と考察
(6)　児童の資質や能力を育成する評価に関する研究のまとめ
２　研究の方法
(1)　文献法　(2)　質問紙法　(3)　テスト法　(4)　授業実践
３　授業実践の対象
大船渡市立末崎小学校　第５学年　１学級（男子 16 名　女子 14 名　計 30 名）

Ⅳ　研究結果の分析と考察

１　児童の資質や能力を育成する評価に関する基本構想
(1)　児童の資質や能力を育成する評価に関する基本的な考え方
ア　児童の資質や能力を育成する意義
文部科学省から出された「『確かな学力』を育む『わかる授業』の創意工夫例」によると、育成すべき資質や能力は、【図１】に示した「思考力」「判断力」「表現力」「問題解決能力」「学ぶ意欲」「知識・技能」「学び方」「課題発見能力」である。
本研究ではこれらの資質や能力のうち、本校児童の実態を踏まえ、質的な高まりを 把握しにくい、思考力、判断力、表現力を育てることをとおして、児童の資質や能力を育成していこうとするものである。



【図１】育成すべき資質や能力

この思考力、判断力、表現力は、児童が「生きる力」としての知識・技能を獲得する過程において、相互にかかわり合いながら発揮されるものである。各教科において思考力、判断力、表現力を高めることは、「生きる力」である「自分で課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」の育成につながっていくものと考える。
イ　児童の資質や能力を育成する評価を行うことの意義
各教科において児童の資質や能力を育成するためには、学習指導において学習指導要領に示された目標の実現状況を適切に把握し、指導の改善に生かしていくことが不可欠である。しかし実際の評価では、知識などの量的な内容は学習の成果が見えやすいため、量的基準を設定しての評価が可能であるが、思考力、判断力、表現力については明確な量的基準を設定することは困難であることから、適切な評価方法の工夫が求められる。また、児童の思考力、判断力、表現力の高まりは、ある程度長期間の児童の変容によって把握していく必要がある。これを児童の側から見ると、自らの目標の実現状況を適切には把握しにくいということであり、評価結果を学習改善に結び付けることが難しいものと考えられる。よって各教科において思考力、判断力、表現力の評価を適切に行うことは、指導改善のみならず学習改善にも有効であり、これらの資質や能力を育成する上で意義深いと考える。
(2)　児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックを作成し活用することの意義
ルーブリックとは1９９０年代になってアメリカで用いられるようになった評価方法の一つであり、

思考力、判断力、表現力、問題解決力などを評価するのに有効だと考えられている。本研究ではルーブリックを「評価方法の一形態であり、資質や能力の段階を児童の具体的な姿とともに示した指標」とする。

ルーブリックは、資質や能力の段階を児童の具体的な姿とともに示していることから、記述された事例によって児童の目標の実現状況を把握することが可能である。また、ルーブリックは児童の長期の発達段階を考慮して作成されていることから、単元が変わっても用いることができ、児童の長期にわたる変容を把握することもできる。

評価の目的として、指導改善と学習改善の二つが挙げられるが、ルーブリックはこのどちらにも効果があるものと考える。児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックは、指導者と学習者にとって目標の実現状況を把握する指標となるばかりでなく、次の学習の方向性を示す指針としての役割をもつものと考える。指導改善と学習改善は、相互に作用し合うことによってより効果を上げるものである。そこで、教師と児童がルーブリックを共有し、ルーブリックを媒介に指導改善と学習改善を行っていくことは、児童の資質や能力を育成するために意義があるものと考える。

(3)　児童の具体的な姿の指標を示したリーブリックを作成し活用を図る学習指導の展開

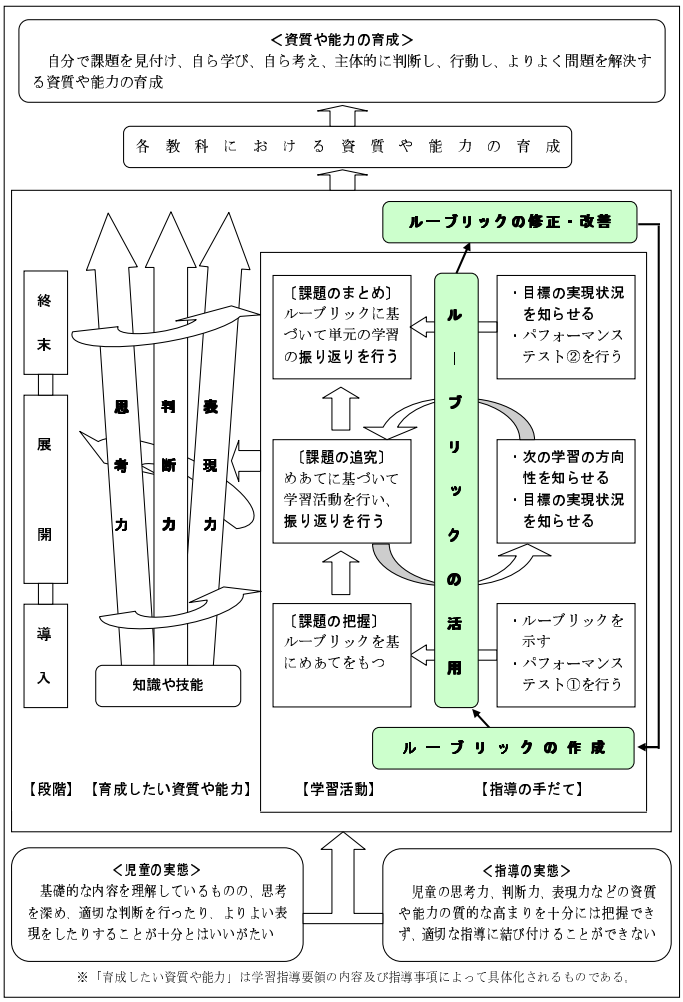
ア　児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックの作成

本研究では、小学校国語科のルーブリックの作成手順を示し、思考力、判断力、表現力に関するルーブリックの作成を行う。資料は「小学校学習指導要領解説」(以下「解説」という。) 及び、国立教育政策研究所によって作成された「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（報告)」（以下「参考資料（報告)」という。）を基礎とし、先行のルーブリックを参考にする。

イ　児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックの活用

本研究では、児童の資質や能力を育成するためにルーブリックの活用を図った学習指導過程を「導入」「展開」「終末」の３段階とする。本資料では、学習活動の概要を【図２】の基本構想図に示し、以下にパフォーマンステストについてのみ述べる。

パフォーマンステストとは、ペーパーテストと異なり、児童に作品を作らせたり、実験・観察、調査活動、発表などを実際に行わせたりすることによって評価を行うものである。



【図２】児童の資質や能力を育成する評価に関する基本構想図

ウ　ルーブリックの修正・改善

ルーブリックは、実践をとおして修正・改善を行うことによって、評価の指標としての信頼性と妥当性を高めていくことができるものと考える。

(4)　児童の資質や能力を育成する評価に関する基本構想図

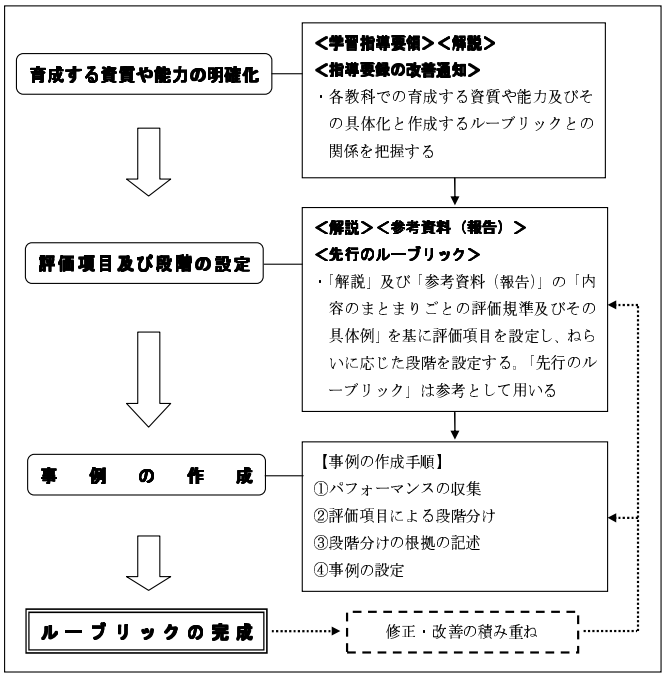
児童の資質や能力を育成する評価に関する基本構想図を前頁【図２】のように作成した。

２　児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックを作成し活用を図る教科の学習指導の手だての試案

(1)　児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックの作成手順

【図３】はルーブリックの作成手順を示したものである。手順は、①育成する資質や能力の明確化、②評価項目及び段階の設定、③事例の作成、である。

育成する資質や能力の明確化とは、各教科で育成する資質や能力が、学習指導要領の内容においてどのように具体化されるかを「解説」等を基に把握し、作成するルーブリックとの関係を明らかにすることである。評価項目及び資質や能力の段階の設定とは､「参考資料（報告)」の「内容のまとまりごとの評価規準及びその具体例」から評価の目的に応じた評価項目を設定し、類似の先行リーブリックを参考にしながら段階を設定することである。事例の作成とは、児童のパフォーマンス（作品、レポート、実技のビデオ、録音等）を収集・分類し、児童の資質や能力がどの段階にあるのかを判断するための事例を作成することである。



【図３】ルーブリックの作成手順

【表１】児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックの活用を図る教科の学習指導の手だての試案

段階	学　習　活　動	ルーブリックの活用	指導上の留意点
導入	1　課題を把握する (1)　学習課題を設定する (2)　めあてを設定する	・パフォーマンステスト①を行う ・ルーブリックを示す	・評価結果を知らせ、課題意識高揚に結び付ける ・単元で高める資質や能力についてめあてをもたせる
展開	2　課題を追究する めあてに基づいて活動を行う 振り返りを行う	・目標の実現状況を知らせる ・次の学習の方向性を知らせる	・単位時間の始めにめあてを設定、修正する場を設定する ・「振り返りカード」で振り返りを行わせ、教師はコメントを記入する
終末	3　課題をまとめる ・単元の学習を振り返る	・パフォーマンステスト②を行う ・目標の実現状況を知らせる	・パフォーマンステスト①からの進歩の状況とともに知らせ、次単元以降の学習で気を付けたいことを記入させる

(2)　児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックの活用を図る教科の学習指導の手だての試案

基本構想に基づき、教科の学習指導の手だての試案を【表１】のように作成した。

３　児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックを作成し活用を図る小学校国語科の学習指導の手だての試案

(1)　小学校国語科におけるスピーチのルーブリックの作成の仕方

ア　育成する資質や能力の明確化

「解説」等を基にし、小学校国語科における思考力、判断力、表現力を【表２】のようにとらえた。

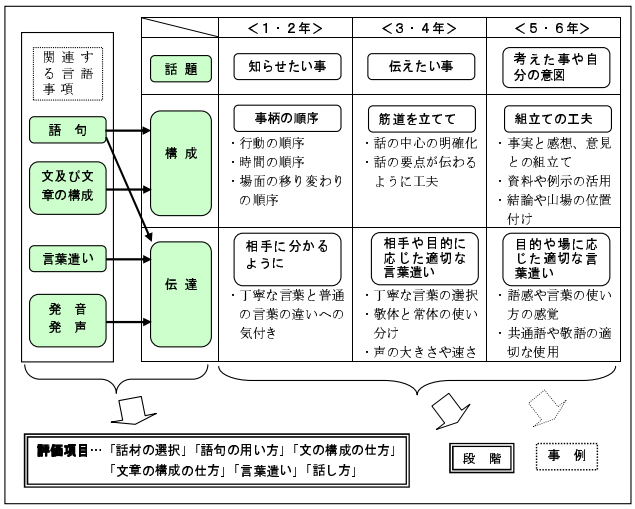
【表２】国語科における思考力、判断力、表現力

資質や能力	意　　味
思考力	想像力や言語感覚を働かせたり､筋道を立てて考えたりしながら表現や理解を行い､自分の考えを豊かにする能力
判断力	表現したり理解したりするときに､相手や目的に応じて適切な言語事項を選び取る能力
表現力	自分の考えを筋道を立てて効果的に話したり書いたりする能力

イ　評価項目及び段階の設定

評価項目は「解説」及び「参考資料（報告)」

を参考に設定する。【図４】は「解説」等を基に「話すこと」についての指導事項とルーブリックの作成手順との関係をまとめたものである。「話すこと」は伝えたい「話題」について話材を「構成」し「伝達」することである。「話すこと」において児童は、話材を選択し、これを構成し伝達するためにどのような言語事項を用いればよいかを判断しているのである。このことから評価項目を「話材の選択」「語句の用い方」「文の構成の仕方」「文章の構成の仕方」「言葉遣い」「話し方」の六つとした。児童は「話すこと」に至る過程において、話材を選択し、大まかに文章の構成の構想を立てるまでは、主に思考力を働かせ、具体的な文として構成し、話すこととして伝達する過程では、主に判断力と表現力を働かせるものと考える。このことから、思考力、判断力、表現力と評価項目の関係を【表３】のようにとらえた。



【図４】「話すこと」指導事項とルーブリック作成手順との関係

【表３】評価項目と思考力、判断力、表現力の関係

評価項目 ＼ 資質や能力	思考力	判断力	表現力
話材の選択	○		
語句の用い方		○	○
文の構成の仕方		○	○
文章の構成の仕方	○	○	○
言葉遣い		○	○
話し方		○	○

「注」 表中の○は評価項目と資質や能力の関係が高いことを示す。

資質や能力の段階の設定の仕方はねらいによって異なる。本研究では学年を越えて使用可能なルーブリックの作成をねらい、実践対象を第５学年としていることから、第５及び第６学年で用いることができるルーブリックを作成する。「話すこと」の能力の段階はレベル１からレベル４の４段階とし、第１及び第２学年の内容をレベル１、第３及び第４学年の内容をレベル２、第５及び第６学年の「おおむね満足できると判断されるもの」をレベル３、「十分満足できると判断されるもの」をレベル４とする。

ウ　事例の作成

実施する単元の内容がスピーチであることを踏まえ、事例は「参考資料（報告）」を基にし、先行のルーブリックを参考にしながら、評価項目に対応した予想される事例を記入し、事例収集前のルーブリックを作成する。（本資料では省略する。）次に、実際の事例を得るために実態調査（本資料では省略する。）を行い、得られた児童のスピーチに関する資料について、評価項目ごとに分析を行い、各段階に位置付ける。最後に、得られた事例と事例収集前のルーブリックの事例を比較・検討し、修正を行ったものが【表４】の事例収集後のスピーチのルーブリックである。

【表４】事例収集後のスピーチのルーブリック

	レベル１	レベル２	レベル３	レベル４
話材の選択	・考えたことのみ、または話材のみを構成メモに書いたり、話をしたりしている	・考えたことと話材との関係をはっきりさせずに構成メモを書いたり、話したりしている	・考えたことと話材の関係をとらえて構成メモを書いたり、話したりしている	・考えたことを伝えるために体験したことだけでなく、見たり聞いたりしたことも話材にして構成メモを書いたり、話したりしている
語句の用い方	・スピーチメモや原稿に平仮名を多用したり、誤字を用いたりしている	・スピーチメモや原稿の一部に既習漢字を用いなかったり、誤字を用いたりしている	・スピーチメモや原稿をほぼ既習漢字を用い、語句の間違いがほとんどない	・語彙数が多く語句の文脈上での意味を考えて用いたり、誤解されない語句（同音異義語など）を用いたりしないようにしている
文の構成の仕方	・修飾語が少なく一文は短いが、主述は整っている	・修飾語や接続語の使用がほぼ正しく、指示語を用い過ぎないようにしているが、文の構成がパターン化している	・接続語や指示語を正しく用い、文の中での語句の係り方や照応を考えて複数のパターンの文の構成を用いている	・意図的な簡潔な表現や不整表現（省略、倒置、繰り返し）を用いている
文章の構成の仕方	・段落を構成していないが、行動や時間などの順序に話材を並べている	・初め、中、終わりの構成などで話の中心をとらえ、順序立てている	・初め、中、終わりの構成などで事実と感想、考えを区別し、話の中心がはっきりしている	・初め、中、終わりの構成などで事実と感想、考えの組立てを工夫している。また、資料や例示を活用している
言葉遣い	・敬体で話そうとしている	・敬体で話しているが一部に日常的な話し言葉や方言が混じっている	・共通語で話し、必要に応じて敬語を用いている	・共通語で正しく話し、必要に応じて敬語を正しく用いている
話し方	・姿勢はよいが、メモを多く見ながら話す。発音ははっきりしている	・時折メモを見ながら話す。場に応じた音量と速さを考えて話している	・メモをなるべく見ずに、意味のまとまりごとに間をとって話す。必要に応じて資料を提示している	・聞き手の反応を見ながら、自然な手振りを交えたり、表情や声の調子を変えたりして話している。資料を提示する場合はタイミングや提示方法を工夫している

(2)　「スピーチステップアップカード」の作成

前頁【表４】のスピーチのルーブリックは、教師が指導改善のために用いるものである。児童に自分の学習状況に気付かせ、その後の学習を改善させるためには、児童が活用する上での配慮が必要である。そこで【図５】のような「スピーチステップアップカード」を作成することとする。

「スピーチステップアップカード」は、次の三つから構成されている。これは、①「児童用スピーチのルーブリック」（教師用ルーブリックを基に、児童自身のレベルの判断を容易にするために事例の文章表現や内容を改めたもの。児童と教師が評価したレベル数を記入できる欄を併設）②「チェックリスト」（児童が「児童用スピーチのルーブリック」だけでは自分のレベルの判断が難しい評価項目について、下位の評価項目を設けてチェックさせ、判断を補うもの）③「ふりかえりコーナー」（児童が活動前のめあてと活動後の振り返りを記入し、教師が次の活動の方向性を与えるコメントを書くもの）である。

(3)　児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックの活用を図る小学校国語科の学習指導の手だての試案

これまでのことを踏まえ、ルーブリックの活用を図る小学校国語科の学習指導の手だての試案を【表５】のように作成した。

(4)　検証計画

「話すこと」についての資質や能力の育成状況及びルーブリックの妥当性について【表６】のように検証計画を作成し、分析と考察を行う。（調査計画は省略する。）

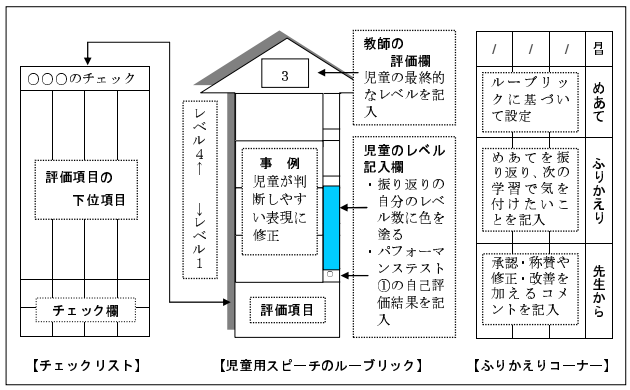
(5)　単元「わたしたちの学校生活」の学習指導案（本資料では省略する。）

４　授業実践

(1)　授業計画（本資料では省略する。）

(2)　授業実践の概要

次頁【資料１】は、単元「わたしたちの学校生活」（16 時間扱い）の授業実践の概要である。（本資料ではスピーチ練習の学習活動の様子のみを記し、他は省略する。）



【図５】スピーチステップアップカード

【表５】児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックの活用を図る小学校国語科の学習指導の手だての試案

	学　習　活　動	ルーブリックの活用及び指導上の留意点
導入	1　課題を把握する (1)　単元の学習課題を把握する (2)　単元の学習のめあてをもつ ・「スピーチにチャレンジ」を行う（パフォーマンステスト①） ・ルーブリックを基にめあてをもつ	○パフォーマンステストの際に気を付けた点を話し合わせ、課題意識を高めるようにさせる ○範読ＣＤを聞かせた後、「スピーチステップアップカード」で自己評価をさせ、自分のめあてをもたせる ○評価結果はカードへコメントとして記入し、自己評価結果を承認・修正するものとする
展開	2　課題を追究する (1)　「スピーチステップアップカード」を活用してスピーチの発表原稿を作成する めあてに基づいて活動を行う 振り返りを行う (2)　「スピーチステップアップカード」を活用してスピーチ練習を行う めあてに基づいて活動を行う 振り返りを行う	○ルーブリックの評価項目のレベルに応じた支援を行う ・単位時間の始めにめあてを設定、修正する場を設定する ・「スピーチステップアップカード」には教師がコメントを記入する。児童が適切な振り返りを行っている場合は承認や称賛、適当でない場合は修正を図る内容とする ・具体的な事例を提示する場合は専用のカードを用いる ・スピーチ練習の際には，ペアやグループで相互評価を行わせる
終末	3　課題をまとめる (1)　5年生の活動報告会を行う（パフォーマンステスト②） (2)　単元の学習を振り返る	○「スピーチステップアップカード」へのレベルとコメントの記入で評価結果を知らせ、単元の学習を振り返らせるとともに次単元以降の学習で気を付けたいことを記入させる

	レベル１及び２	レベル３
話材選択	・構想メモで伝えたいことと話材の関係をとらえさせる	・見たことや聞いたこと、資料などの体験以外の話材についても考えさせる
語句の用い方	・原稿を書く際は既習漢字を使わせ、誤字・脱字がないか確認させる チェックリストの活用	・聞き手に自分の考えをよりよく伝えられる語句、誤解のない語句を考えさせる
文の成構仕方	・主述の関係に気を付けさせ、修飾語や接続語を用いて文を詳しく書かせる チェックリストの活用	・意図的な簡潔な表現や不整表現（省略、倒置、繰り返し）を例示する
文章の成構仕方	・構想メモを初め，中，終わりの構成で考えさせ、一つの段落に一つの内容になるように指示を与える チェックリストの活用	・事実と考えの組立ての工夫や資料や例示の活用をさせる
言葉遣い	・日常の話し言葉や方言を使っていないかをペア練習でチェックさせる チェックリストの活用	・敬語が必要な場合は個別に指導を行う
話し方	・原稿読みにならないようスピーチメモを工夫させる チェックリストの活用	・表情や声の調子、効果的な資料の提示などを考えさせる

【表６】検証計画

検証項目	対象	検証内容	検証方法	処理・解釈の方法
小学校国語科における資質や能力の育成状況	児童	思考力、判断力、表現力の表れとしての「話すこと」についての以下の評価項目 ①話材の選択 ②語句の用い方 ③文の構成の仕方 ④文章の構成の仕方 ⑤言葉遣い ⑥話し方	授業者による筆記を含むパフォーマンステスト法	5 頁【表 4】のスピーチのルーブリックに基づき、異なるスピーチの課題によるパフォーマンステストを単元導入時と単元終末時に実施する 《単元導入時》 ①～⑤については観察及び児童のテスト用紙への記述内容から、⑥については観察からとらえ、分析及び考察を行う 《単元終末時》 ①～⑤については観察及び授業中のプリントへの記述内容から、⑥については観察からとらえ分析及び考察を行う

検証項目	検証内容	検証方法	処理・解釈の方法
ルーブリックの妥当性	上表に同じ	授業者及び担任による筆記を含むパフォーマンステスト法	授業者と担任による評価結果を照らし合わせ、総合的に分析及び考察を行う

【資料１】 スピーチ練習の学習活動の様子（13／16 時）

パフォーマンステスト①

児童Ｂのスピーチの事例（地域や家庭でリサイクルを進めるための自分の考えについて）

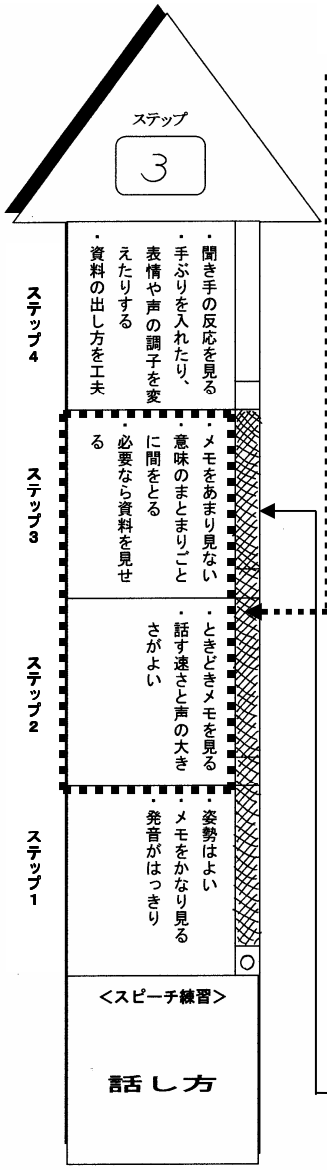
＜姿勢やメモを見る回数＞　胸前に原稿を持ち、最後まで顔を上げずに全３文を読む。
＜声の大きさや話す速さ＞　大きさや速さは問題ないが、原稿を読むために話し掛ける感じはない。

《評価》…声の大きさや話す速さはよい点だが、メモを見たまま読むために、聞き手を意識することがなくレベル１とした。 **⇒レベル１**

学習活動

児童の「ふりかえりコーナー」への記述

教師の支援



１　パフォーマンステスト①の結果を基にめあての設定を行う

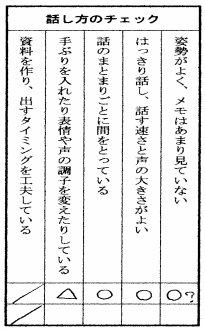
声の大きさ、メモをあまり見ないことに気をつける。

※児童Ｂはパフォーマンステスト①がレベル１だったことからレベル２以上を意識しためあてを設定した。

２　スピーチ練習を行う

・一人練習をする

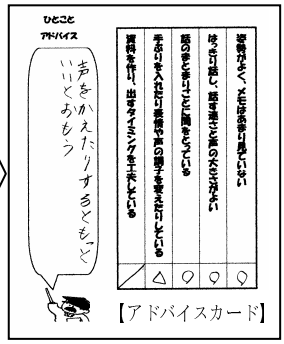
自分の設定しためあてに基づいて練習をした後、チェックリストを使って自己評価を行わせた。



【チェックリスト】

・ペア練習をする

チェックリストを基にアドバイスカードを作成し、同じレベルを目指す児童のペアを作り、相互評価を行わせた。



【アドバイスカード】

３　めあての振り返りを行う

最初はできなかったけど、今日はできるようになってよかった。

自己評価ではステップ３だったが、話すのがやや速く、間の取り方が十分ではなかったことから、「句点で息を大きく吸うこと。」と自己評価の修正を促し、次の活動の方向性を示すコメントを記入した。

パフォーマンステスト②

児童Ｂのスピーチの事例（委員会活動の苦労と責任感について）

＜姿勢やメモを見る回数＞　聞き手を見ながら、全 15 文を１～2 文ごとにメモを確認しながら話す。
＜声の大きさや話す速さ＞　声が大きくなり、張りがある。話し方にめりはりが出てきた。

《評価》…ややメモを見る回数が多いものの、話の流れは途切れることがない。メモを見ることが、ちょうどよい間を取ることになっている。 **⇒レベル３**

「注」表中の「レベル」と「ステップ」は同じ段階を示す。（児童用のルーブリックではステップという。）

５　実践結果の分析と考察

(1)　児童の資質や能力の育成状況

ルーブリックの作成と活用を図った手だての試案の妥当性について、６頁【表６】の検証計画に基づき、５頁【表３】に従って思考力については「話材の選択」「文章の構成の仕方」から、判断力と表現力については「語句の用い方」「文の構成の仕方」「文章の構成の仕方」「言葉遣い」「話し方」の評価項目から分析及び考察を行った。

ア　評価項目全体の状況

【表７】は全体の育成状況について評価項目別に示したものである。六つの評価項目のうち、「話材の選択」「語句の用い方」「文章の構成の仕方」「話し方」の四つで児童のプラスへの変容が大きくみられた。しかし、「文の構成の仕方」「言葉遣い」は大きな変容はみられなかった。本資料ではこれらのうち、指導のねらいから「話し方」についてのみ述べる。(他の評価項目については省略する。)

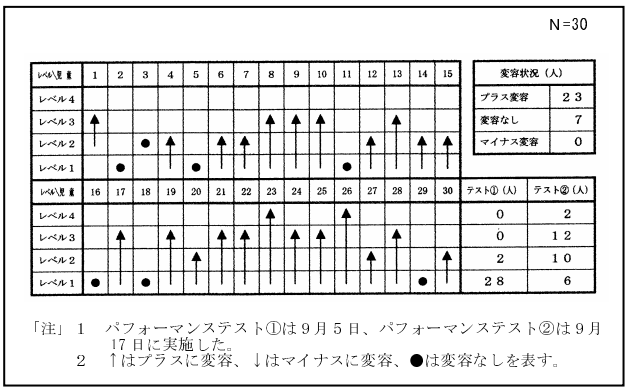
【表７】評価項目全体の状況　Ｎ＝30（単位：人）

評価項目／変容状況	話材の選択	語句の用い方	文の構成の仕方	文章の構成の仕方	言葉遣い	話し方
プラス変容	２１	２７	１９	２５	７	２３
変容なし	９	３	１１	５	２０	７
マイナス変容	０	０	０	０	３	０

イ「話し方」の状況

【表８】は「話し方」の状況をみるために、パフォーマンステスト①とパフォーマンステスト②における児童の状況を５頁【表４】のルーブリックを用いて判断し、結果をまとめたものである。

【表８】「話し方」の状況



「注」１　パフォーマンステスト①は９月５日、パフォーマンステスト②は９月17日に実施した。
２　↑はプラスに変容、↓はマイナスに変容、●は変容なしを表す。

30 人中、プラスに変容した児童は 23 人であった。パフォーマンステスト①ではレベル１（メモを多く見ながら話す）の児童が 28 人であり、このうちのほとんどの児童がメモをそのまま読むという状況であった。パフォーマンステスト②ではレベル２（時折メモを見ながら話す）の児童が 10 人、レベル３（なるべくメモを見ずに、意味のまとまりごとに間を取って話す）の児童が 12 人になっている。これは、児童にパフォーマンステスト①によって自分のレベルを知らせた上でめあてを立てさせ、チェックリストを用いてスピーチ練習を行わせたことによるものと考える。また、チェックリストを基に作成したアドバイスカードを用いて、同じレベルの児童のペアを作ってチェックさせたことも有効に働いたものと考える。さらに、児童の振り返りに対して教師が次の活動の方向性を示すコメントを書いたことは、児童自身の学習状況に気付かせ、学習改善に結び付けられたものと考える。

変容しなかった児童は７人であり、レベル２のままの児童が１人、レベル１のままの児童が６人であった。これは、スピーチ練習時間が限られていたために、ルーブリックの事例では変容を確認するには至らなかったものと考える。

このように 30 人中 23 人の児童がプラスに変容していることから、判断力、表現力は「話し方」において高まったものと考える。

他の評価項目についても同様に分析した結果、思考力にかかわる「話材の選択」では変容がみられ、「文章の構成の仕方」では大きな変容がみられたことから、思考力はおおむね育成されたと考える。また、判断力、表現力にかかわる五つの評価項目のうち、三つでは変容がみられたものの、「文の構成の仕方」と「言葉遣い」では変容が小さかった。思考力、判断力はおおむね育成されたと考えるが、パフォーマンステスト①で把握した児童のレベルに応じた支援の仕方を吟味する必要があると考える。

(2)　ルーブリックの妥当性

ルーブリックの作成と活用を図った手だての試案の妥当性について、６頁【表６】の検証計画に基

づき、同一のルーブリックとパフォーマンステスト①②によって、授業者と担任の評価結果を基に分析及び考察を行った。

ア　評価項目全体の授業者と担任の評価結果

【表９】は全評価項目について授業者と担任の評価結果をまとめたものである。

六つの評価項目のうち、授業者と担任の評価結果に異なる傾向がみられた項目は、「話材の選択」「文の構成の仕方」「言葉遣い」の三つであり、同じ傾向がみられた項目は、「語句の用い方」「文章の構成の仕方」「話し方」の三つであった。本資料ではこれらのうち、異なる傾向のみられた「話材の選択」についてのみ述べる。（他の評価項目については省略する。）

【表９】全評価項目の授業者と担任の評価結果（平均）

N＝30

	授業者の評価			担任の評価		
	テスト①	テスト②	増減	テスト①	テスト②	増減
話材の選択	１．９	２．８	＋０．９	２．３	２．６	＋０．３
語句の用い方	１．６	２．９	＋１．３	１．６	２．８	＋１．２
文の構成の仕方	１．８	２．５	＋０．７	１．８	２．８	＋１．０
文章の構成の仕方	１．６	２．６	＋１．０	１．７	２．７	＋１．０
言葉遣い	２．６	２．８	＋０．２	２．８	３．０	＋０．２
話し方	１．１	２．３	＋１．２	１．１	２．２	＋１．１

「注」　表中の数値は児童の評価結果（レベル１～４）の数値の学級全体での平均値を示す。

イ　「話材の選択」について

【表 10】と【図６】は、「話材の選択」について授業者と担任の評価結果をまとめたものである。

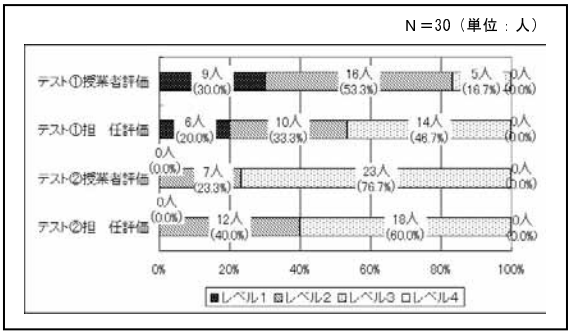
パフォーマンステスト①と②を比較すると、パフォーマンステスト②では、授業者と担任の評価結果に大きな違いはみられない。しかし、パフォーマンステスト①では授業者が 1.9 と評価したのに対し、担任は 2.3 としていて、授業者の評価結果が低くなっている。内訳をみると、レベル３（考えたことと話材の関係をとらえて構成メモを書いたり、話したりしている）と判断した児童は授業者は５人、担任は 14 人と大きく異なっている。これはルーブリックの事例の表現があいまいだったことが原因と考える。「話材の選択」の事例は「考えたこと」と「話材」との関係の把握の仕方でレベルを設定している。レベル２では「関係をはっきりさせずに」レベル３では「関係をとらえて」としたが、授業者と担任ではこの解釈に違いがあったものと考える。また、パフォーマンステスト①で得られた資料では十分に判断ができない部分があったことも原因と考える。

【表 10】「話材の選択」の評価結果（平均）

N＝30

授業者の評価			担任の評価		
テスト①	テスト②	増減	テスト①	テスト②	増減
１．９	２．８	＋０．９	２．３	２．６	＋０．３

「注」　【表８】に同じ。



【図６】「話材の選択」の評価結果（内訳）

以上のことから、「話材の選択」についてはレベル２と３の違いがはっきりするように事例を具体化する必要があると考える。また、パフォーマンステスト①のテスト問題を吟味し、必要な資料を十分に得られるようにしなければならないと考える。

ウ　ルーブリックの改善点と活用上の課題

これまでのことを踏まえ、ルーブリックの改善点と活用上の課題を【表 11】のようにまとめた。

【表 11】ルーブリックの改善点と活用上の課題

評価項目	ルーブリックの改善点	活用上の課題
話材の選択	・レベル２と３の事例の差を明確にする	・複数の教師で用いる場合は、事例について構想メモやスピーチ原稿等で共通理解を図る
語句の用い方	・レベル４の事例に例示を加える	・無し
文の構成の仕方	・レベル３の事例に例示を加える ・一文が短くても効果的な場合を考慮する	・複数の教師で用いる場合、事例についてスピーチ原稿で共通理解を図る
文章の構成の仕方	・レベル２と３の事例の修正を行う ・事実と感想、意見を分けなくてもいい場合（心情描写等）を考慮する	・無し
言葉遣い	・レベル２の日常の話し言葉の例示を加える	・無し
話し方	・無し	・下位の評価項目間でレベルが違った場合の評価の仕方を吟味する
各評価項目共通	・レベル内での変容がみられた事例についてレベルの設定の仕方を吟味する ・レベル３で質的にレベルが高い事例とレベル４の事例の関係を明確にしていく	・ルーブリックとチェックリスト、カード類の提示の仕方を吟味する ・確実な評価資料を集めることのできるパフォーマンステスト問題を作成する ・未習内容が含まれるルーブリックの提示の仕方について吟味する

６　児童の資質や能力を育成する評価に関する研究のまとめ

児童の具体的な姿の指標を示したルーブリックを作成し活用を図る評価について、小学校国語科における授業実践において明らかになったことを成果と課題の２点についてまとめる。

(1)　成果

ア　スピーチのルーブリックを作成し、パフォーマンステストと組み合わせて評価を行うことで児童の目標の実現状況を評価項目ごとのレベルとして把握できたこと。

イ　スピーチのルーブリックを用いて目標の実現状況を適切に把握できたことによって、児童のレベルに応じて適切なカードを与えたり、ペアを作ってスピーチ練習をさせたりするなど、児童の実態に応じた支援が可能だったこと。

ウ　「スピーチステップアップカード」を用いて児童に自己評価と振り返りを行わせ、教師が評価結果を次の学習の方向性とともに知らせたことから、児童に自分の学習状況に気付かせ、学習改善を行わせることができたこと。

(2)　課題

ア　実践によって得られた事例及びルーブリックの改善点を基にルーブリックの修正・改善を行い、ルーブリックの信頼性及び妥当性を高めていくこと。

イ　ルーブリックを用いての評価の場面やレベルを判断する方法、ルーブリックの児童への提示の仕方を吟味していくこと。

以上のことから、ルーブリックを作成し活用を図る学習指導についての手だての試案は、児童の資質や能力を育成する上で妥当であるという方向性を確認することができた。

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

１　研究のまとめ

この研究は、教科の学習指導において、ルーブリックを作成し活用を図る児童の資質や能力を育成する評価について明らかにし、学習指導の改善に役立てようとするものであった。そのために、児童の資質や能力を育成する評価に関する基本構想を立案し、手だての試案に基づいた授業実践を行った。その授業実践の結果に基づき、手だての試案の妥当性を検討した結果、仮説が有効であるという方向性を確認でき、児童の資質や能力を育成する評価についてまとめることができた。

２　今後の課題

(1)　作成したスピーチのルーブリックを更に効果的に活用するための工夫や、他の単元や学年での活用の方法を実践的に明らかにするとともに、ルーブリックの修正・改善を重ねていくこと。

(2)　他領域や学年、他教科においてもルーブリックを作成し活用を図る授業実践を行うことで、ルーブリックについての研究の幅を広げていくこと。

【参考文献】

キャロライン・Ｖ・ギップス著　「新しい評価を求めて」　論創社　2001 年

田中耕治編　「新しい教育評価の理論と方法」　日本標準　2002 年

鈴木秀幸著　「目標準拠評価における評価基準の体系化の方策」(「指導と評価」連載)
図書文化　2002 年４月～2003 年２月